

2015
秀作

第13回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール



うちの家計は火の車

岡山県・岡山県立岡山大安寺中等教育学校 5年 小松原 陸

「うちの家計は火の車なんじゃから、きちんと節約しなさい。」僕の父が毎日のように言う言葉だ。僕の家族は、妹と父、母、そして僕の四人家族だ。僕の母は病気を患っており、家計をやりくりしているのは父である。

そんな父は、とにかく節約家だ。水を少しでも出しっ放しにしていたら、怒られる。物の扱いにも父は厳しい。そんな我が家では、僕が中学生のころから、「家族会議」が年に数回開かれる。そこでは、主に節約術について話し合いが行われる。長年に渡って行われてきた節約術。実際、どのくらい節約できているのか気になり、調べてみることにした。

まず、基本的なことだが、水や電気を大事に使うことだ。これは、幼いころから言われ続けてきた。調べてみると、歯磨きの際に水を30秒間流しっ放しにするのと、コップ1杯で済ませるのでは、10分の1の水道代で済むそう。年間だと1万円以上も差が出るらしい。まさに「塵も積もれば山となる」だ。

それから、良い物を長く使うことだ。我が家には、輪島塗の食器がある。もう使い始めてから20年以上になるらしい。小学校の頃に、高い輪島塗の食器をどうして買ったのかと聞いた時、父が

「一見、高い物を買うことは、節約じゃないと思うかもしれん。じゃけど、高い物には高いなりの価値があるんよ。この輪島塗の食器だって、大事に使えば100年以上も使えるんじゃけえ。」

と答えていたことを、今でも覚えている。だから物の扱いに厳しかったのだと、その時ようやく理解することができた。1つ1万円したという輪島塗の食器だが、20年使っているのも、値段的には普通の食器と変わらないのだ。

また、中学生の時の家族会議で、妹と節約術について考えたこともあった。その時考えたのが「自然の力を上手に使う」ということだ。例えば、雨水をタンクに貯めて花の水やりに使ったり、ゴーヤを植えて緑のカーテンをつくった

りしている。この案は、父や母に喜んでもらった。今では習慣のようになっている。

子供のころは、父が仕事をして家計をやりくりすることは当たり前だと思っていた。でもある時、働きながら家計を一人で、全てやりくりする父の努力に気づいた。一度だけ、

「節約ばかりして、こんなケチケチな貧乏家族に生まれてきたくなかった。」

と両親にひどいことを言ってしまった。父は、「迷惑かけてすまない。」の一言だけ。僕は何も言えなかった。強く自責の念に駆られた。数日後、偶然父のつけてきた何十冊もの家計簿を見つけた。そこには、光熱費や食費などが細かく書かれていた。そこから、僕は父の今までの努力に気づき、そして「節約」の本当の意味について考えた。節約とは自然と共存することではないだろうか。水道や電気を無駄使いしないことは、環境を守ることに繋がるのではないだろうか。「お金」と「環境」という関係のなさそうなものが、僕の小さかった頭のなかで繋がった。

高校生となった今でも、家族会議は続いている。「家計は火の車」という言葉も、父は相変わらず言い続けている。あと、昔父がつけてきた家計簿、つまり父の努力をこっそり見たことは、内緒にしてある。

去年の家族会議で、僕は「家のお金の事情を家族で共有したい」と提案した。子供にお金のお話をするのは良くないと思う人もいるだろうが、僕はそうは思わない。もちろん、小さな子供には難しいことかもしれない。しかし、子供が大きくなるにつれ、光熱費や水道代のことも話題に出してもよいと思う。そうすることで、お金に対しての考えが深まり、子供の生活力も自然と身についていく。何よりも、お金のありがたみを実感できる。父と母にこの理由を言ったところ、家族で光熱費や経費を共有して、これからは家族みんなで考えることにした。実際に、水道代を見てみると、考えていたよりも高かった。僕の家はオール電化のため、やはり電気代がかさんでいることが明確になった。しかし、四人家族の平均と比較してみると、父の節約意識が高いおかげか、平均よりも安く収まっていることが分かった。

家族会議では毎回、一人一人が家計のことについて真剣に考える。例えば、高校でかかる授業料や教科書代について考えた時には、高校に通うことは、大

変な親の労力が必要だと思った。家族で家計に関して話し合う中で、一人よりも、四人で考えた方が画期的で、豊富な意見が出ると、父が言っていた。

我が家の家計は火の車だ。でも、誰もそんなことを悲観はしない。困った時は、四人で知恵を出し合えばいい。助け合えばいいんだから。

そういえば、最近、妹までもが「節約」という言葉を口癖にし始めた。この間も冷房を少しつけていただけで、妹に「私たちの家計は火の車なんじゃけえ、もっと節約して。なんで自然の温度で耐えれんのん。」

と注意されてしまった。もちろん、妹の物言いは楽観的で、恥ずかしげもなかった。その時、ふと後ろを見ると、そこには少し笑った父の姿があった。

